ありあけ

佐賀大学農学部
同窓会報
No.19

発行日　2017年１月１日
編　集　会報編集委員会
発行　佐賀大学農学部同窓会
住所　佐賀市本庄町１ 佐賀大学内
TEL 0952-23-1253　FAX 0952-25-5700
E-mail dousoukai@sadai.jp
ホームページ　http://sadai.jp/alumni/

巻頭言

将来の「夢」の実現に向けて果敢な挑戦を

ちくご法律事務所　弁護士　伊　藤　修　一
（S57年卒・農経）

私は、昭和57年に農学科を卒業し、その後、いろいろと紆余曲折を経た後、現在福岡県筑後市で弁護士をしています。

司法試験に合格したのは平成13年ですが、この年は佐賀大学農学部からもう一人、八木義明さんが合格されており、八木さんは今長崎県大村市で弁護士をされています。

また、私と同じ年に司法試験に合格した弁護士の中には、少数派とはいえ、数名程度の農学部出身者がおり、私と仲のよい福岡の弁護士は、京都大学の林学科出身で、学生時代は演習林の木のサイズばかり測っていたと言っていました。

農学部から弁護士というのは、全くイレギュラーな進路ですが、それでも結構農学部の出身者がいる。なぜだろう。考えているうちに、それは、農学部で扱っている「学問の懐の広さ」にあるのではないかと思うようになりました。

今から思うと、私が独学で法律の勉強をして、司法試験に合格できるレベルに達することができたのは、佐賀大学時代、恩師や先輩に徹底的に鍛えられたからだと思います。

私は２年生の後期から当時の農業経営経済学教室に所属し、そこで、当時の恩師である伊東勇夫先生、陣内義人先生、内海修一先生から、経済学や農業経済学、農業経営学、協同組合論などの、社会科学系の学問の手ほどきを受けました。

また、現在佐賀大学で教授をされている白武義治先生、長崎県立国際大学の元副学長の木村務先生など、佐賀大学の先輩からアダム･スミスの「国富論」やマルクスの「資本論」などの古典の読み方を教わりました。

卒業研究は苦労の連続でしたが、現在の協同組合原則の原型といわれる「ロッチデール原則」が、産業革命後の経済・社会の変化の中で試行錯誤を重ねながら定式化されていく過程を取上げ、「歴史的なものの見方」や「一人は万人のために、万人は一人のために」という協同思想の大切さを学んだことも、その後の大きな財産になっています。

このように、佐賀大学農学部で、作物学や育種学、植物病理学等の理科系の学問以外に、社会科学系の勉強をしていたことが、後の法律の勉強の際に大いに役立ったと思います。

考えてみれば、農学部は、生物学系の学問がメインではあるものの、農業機械のような工学系、食品化学のような化学系、畜産のような医学系、そして、私が所属していた経済学系といった、いろいろな分野の学問から成り立っています。

このことは、興味を持って努力をすれば、いろいろな方向へ発展しうることを意味していないでしょうか。

私が、一般には畑違いと思われる社会科学系の分野に進んだ、その基礎は農学部時代の勉強にあったと思っています。

若い学生の皆さんには、農学部という懐の広い学部の中で、いろいろなことに興味を示して、勉強し、本当にやりたいことを見つけて、どんどん突き進んでいって欲しいと思います。

在学生・大学と同窓会との絆を深めるために

在学生と教職員・卒業生の交流会を開催

平成28年11月16日、54名の学生が参加された就活ガイダンス終了後、「かささぎホール」において、在学生の他に教職員や卒業生から約30名の参加をいただき「在学生と教職員・卒業生の交流会」を開催しました。交流会は別名「おでん会」と称し、昨年に引き続き３回目の開催となりました。

先立って行われた就活ガイダンスの講師（伊藤ハムウエスト：髙浪様（H27年卒・応用生物）、山崎製パン：宇土様（H26年卒・生物環境）、ＪＡさが：渡邊様（H28年卒・生物環境）、新日本製薬：中尾様（内定・文化教育学部在学中）・坂本様（内定・生物環境科学科在学中）、渡辺様（内定・生命機能科学科在学中））に加え、今回は、佐賀県庁支部や会報「ありあけ」に毎回広告を出していただいている森光商店様からも同窓会会員である松雪様（H26年卒・生命機能）、浅田様（H22年卒・応用生物）、高須様（H28年卒・生命機能）が参加していただくなど、在学生との絆をより深める良い機会になりました。

参加した在学生は、OB・OGや参加いただいた企業の人事担当の方を囲んで、体験談などに真剣なまなざしで耳を傾けていました。

昨年のアンケート調査の結果では、「就職活動の悩みは？」という問いには「自分が何に向いているのかわからない」に72％の方が、「情報が多すぎて自分に必要な情報が何かわからない」に41％の方が「該当する」としていました。また、「学業との両立

が難しい」という回答も多く見られました。

今年もアンケート調査を行い、卒業生に聞きたいことでは「就職活動に備えてすべきこと」、「就業してからの経験」の割合が昨年より高くなっていました。また、進路の希望地では、「九州内」が75％、「九州外」が25％で、「佐賀県内」と回答した学生は19％で出身地も佐賀県内でした。今後の在学生支援活動の参考にしたいと思います。

「在学生を支援する同窓会活動で知っているものは？」という問いには、回答のあったうち「キャリアデザイン講座講師や就職ガイダンス講師の選定派遣」を25％の方が「知っている」と答えていただきましたが、半数が無回答で、まだまだ活動内容が知られていないことを感じました。

交流会の最後に、県庁支部の菊池様（H24年卒・応用生物）と岩永様（H24年卒・生物環境）から在学生に対する熱いエールをおくっていただき、閉会

となりました。

今回の交流会については、参加したほとんどの方から「有意義だった」と回答していただき、同窓会として、これからもこのような機会を積極的につくり、同窓会と在学生・大学との絆を一層深めて行きたいと思います。

田中　俊之（Ｓ59年卒・農経）

佐賀大学農学部・同窓会意見交換会を開催

平成28年12月１日に菱の実会館において、「佐賀大学農学部と同窓会との意見交換会」を開催しました。主な内容は次のとおりです。

１．同窓会の主な取組について【川副農学部同窓会長から】

３年前から始めた在学生と同窓生との意見交換会については、在学生との意思疎通を図る良い方法を検討できればと考えています。平成22年度から開講されているMOT講座の開催への支援を行っており、修了生が様々な農業関連分野で活躍されるなど、成果が芽生えています。

毎年２回の会報の発行や支部活動の活性化など、同窓会員の絆づくり強化に取り組んでいます。また、巻頭言については、各界で活躍されている卒業生の方に、大学への期待や現役生へのメッセージなど毎回、玉稿をいただいております。卒業生約7,500人のうち約4,500名の動向を把握し、会費未納者に対して卒業後節目の年に納入推進を行っています。

理系学部の再編の動きがある中、同窓会としてお手伝いできるところがあれば支援していきたい。また、卒業生の就職支援ができればと考えており、農学部の先生からもお知恵をいただければと思っています。

２．農学部の現状と今後の方向【渡邉農学部長から】

農学部として農学部同窓会や卒業生から受ける支援は大きい。学生や教員が地域の中に入って、または地域の最前線で活躍している方々に大学に来ていただいて、教育と研究の一層の充実を図りたい。近い将来、地域で先進的な農業に取り組まれている方にも教壇に立っていただきたいと考えている。

佐賀県と佐賀大学と（株）オプティムとでＩＴ農業の推進を行っており、（株）オプティムの社長は農学部の同窓生である。同窓生と共同研究を一緒に行っていく中で、大学の研究の活性化にもつながっている。このような同窓生とのつながりによる研究や教育の場の強化に期待している。

との発言がありました。

３．各学科の現状等【各学科長から】

出席いただいた各学科長の先生方から、主に学科での研究成果（サガンルビーや悠々知酔の開発など）と、卒業生の進路について報告をいただきました。農学部の学生は女性の比率が半数を超えていること、食品系企業へ女性の就職が多いこと、就職率は他学部にくらべて高いこと、大学院へ進む学生が増えてきたことや、就職先としてはやはり企業が多いものの公務員へも進んでいること、などを詳しく報告いただきました。

４．理系学部の改組について【渡邉農学部長から】

平成30年度に理系の学部と大学院を同時に改組する案を文部科学省と話し合いながら検討している。現在、農学部内に３学科あるが、改組後、「農学部・生物資源科学科」１学科となり、①生命機能科学コース、②生物科学コース、③食資源環境科学コース、④国際地域マネジメントコースの４つのコースを設ける計画となっている。大学院は、農学・理工学・医学・看護学が１つになり、創成科学研究科となる。農学部系の専攻は、生物資源科学専攻と先進健康科学専攻になる。今回の改組は、地域創生の視点から、

佐賀県の産業を元気づける、あるいは地域を活発化させるために、大学が人材の育成と研究・開発を行うものである。佐賀県は農業県であるので、生物資源を生み出すことを基本にして、加工・販売して、サービス産業を興したい。

との説明がありました。

5．意見交換

意見交換では、同窓会の教職員支部から「地方創生の時代、農業の重要性を示す手だて」について提案をしました。

教職員支部としては、農学部とＪＡ等の農業関連機関で、地方創生の時代に「農業・食」を重視するよう、県の重要施策に掲げてもらうよう提言できないものかということでした。

また、併せて、①大学で講義に使用されている農業のデジタル教材（コンテンツ、デジタルデータ）の提供、②有為な人材を地域に残せるよう県内農業高校生枠の設定、③大学での基礎研究と農業高校での応用（加工、栽培等）のコラボ、共同研究等の実施、を要望しました。

一方、農学部からは、佐賀大学と佐賀県（県の試験研究機関）とのつながりはあるものの、佐賀大学と農業生産者とくに農協青年部等の若手農家とのつながりが少ないので、今後、大学と農家との交流を図り、生産現場の課題（玉葱のベト病等）を吸い上

げて、現場にマッチした研究を行っていきたいとの要望がありました。

これに対し、佐賀県農協連支部から、大学と農協青年部との交流の場を設け、連携を深めていきたいと回答しました。

このほかにもいろいろな話題で意見交換を行い、有意義な会となりました。

最後に、農学部及び大学院の改組については、同窓会会員の関心もあるところです。ただ現行体系についても分かりづらくなっている感もあり、次期の改組に当たっては同窓会会員が集まる会合等で情報提供いただくような機会を是非同窓会でも検討していきたいと思います。

田中　俊之（Ｓ59年卒・農経）

農業版MOT教育の裾野の拡大に向けて

1　共に学ぶMOT生

農業版MOTは平成28年度で７年目を迎え、これまで大学院生29名、社会人58名が修了しました。こ

アグリ・マイスターの会（H28. 7）

のうち社会人受講者は、農業法人経営者・個別農業経営者・後継者が28名、新規就農者が２人、行政・普及・研究機関職員10名、食品関連経営者６名、金融機関等の異業種産業従事者12名で、農業経営者を中心に多様な職種構成になっています。

農業経営者にとっても異業種の方にとっても多面的なものの見方や考え方を磨く場になっており、ネットワークを活用した新しいビジネス展開のきっかけにもなっています。また、大学院生にとっても農業・農村の現実の課題に肌で触れ、考える機会になっています。

韓国伝統もち米コチュジャン作り体験（H28. 9）

2　多様なビジネス展開

修了生の具体的な取組として法人化を通した雇用型農業経営への転換、自家農産物の加工等によるトマトジュース、ドレッシング、麹加工品の開発など６次産業化への挑戦、直売所との連携による乾燥粉末野菜、ドライベジタブルの商品化など農商工連携の取組、女性の視点を活かした新たな農の模索、廃校になった小学校を活用した農福連携による障害者支援施設の設立、宅配弁当会社による農・商・教・医の連携ビジネスの展開などが生まれており、また、近年では台湾・香港への農産物輸出の挑戦も始まっています。

修了生の中から農林水産大臣賞、環境大臣賞、農林水産副大臣賞など全国規模での表彰を受賞する者も生まれており、多彩な分野での活躍が進んでいます。

3　常に取組成果を確認し合うこと

MOTの教育の一環として、毎年、一般公開の特別講演会を実施していますが、平成28年度は「農水産物の新たな市場を切り拓く」をメインテーマに、ジェトロの農林水産・食品部長の阿部勲氏に「地域農水産物の一層の輸出に向けて」、マーケティングプロデューサーの平岡豊氏に「需要創造を目指す農業マーケティング戦略」を講演いただき、成熟市場の下での農産物の需要開拓の途を探りました。

修了生からは未来館代表取締役社長　西野博道氏（MOT １期生）が「農家と共に創り上げる通信販売の商品開発から年商１億円までの道すじ」、佐賀市あんみつ姫生産農家の石橋健一氏（MOT ６期生）が「ブランドみかん産地の発展と若手農業経営者の夢」と題して実践報告を行いました。

会場一杯の150名が参加する中で、MOT修了生の自信に満ちた報告に参加者の注目が集まりました。これからも様々な活躍の取組を広く地域社会に紹介していきたいと考えています。

4　MOTの今後の取組

MOT教育プログラムの今後の方向として「地域・国際連携による農業版MOT教育ネットワークの構築」を掲げています。

平成26年11月に佐賀大学農学部、東京農業大学生物産業学部、韓国農水産大学校、忠北大学校、韓国農協大学の５農学系学部で「農業人材育成に向けた国際連携協定」を締結しています。これまでも研究者間の国際シンポジウムの開催や学生・農業者等の相互訪問・現場視察等を重ねてきましたが、平成28年度からは一歩進めて、日韓における農業版MOT共通テキストの作成に着手しており、学生のインターンシップの受け入れも計画しています。

現在、佐賀大学農学部では、①IT農業・スマート農業、②ニュートラコスメ研究拠点事業、③オリジナルブランド開発プロジェクト、④アグリ医療開発プロジェクト、⑤藻類バイオマスの活用に関する開発研究プロジェクトなど、地域資源や新たな技術を踏まえた重点研究プロジェクトが精力的に進められています。

これらの革新技術を通した地域産業振興の担い手となり得る農業人材を育成するためにも農業版MOT教育の裾野の拡大が求められています。

農学研究科特任教授　内海修一（Ｓ49年院卒・農経）

ブドウ有機栽培農家を訪問（H28. 9）

農学部研究室紹介 その⑫

生命機能科学科　応用微生物学研究室

担当教授：小林元太　後藤正利

応用微生物学研究室は、微生物が有する機能を利用して、有用物質を生産したり、環境を良くしたり、生活を豊かにすることを目的とした研究を行っています。この応用微生物学研究魂は、創設以来、猿野琳次郎教授、村田晃教授、加藤富民雄教授、神田康三教授、そして現在の小林、後藤まで綿々と受け継がれています。

現在の研究室のメンバーは、教授２名、大学院生３名、学部４年生３名、学部３年生６名とこぢんまりとしていますが、少数精鋭で頑張っています。小林は、平成17年５月に九州大学大学院農学研究院から佐賀大学有明海総合研究プロジェクトに異動してきました。その後、平成20年６月に加藤富民雄教授の後任として農学部生命機能科学科に配置換えとなり、平成25年10月に教授に昇任しました。有明海総合研究プロジェクトから引き続き「有明海底泥中の微生物相解析」や「有明海由来の微生物の性状解析」等を行い、現在では「未利用バイオマスからのアセトン・ブタノール発酵の効率化」や「食品製造・醸造に応用するための有用乳酸菌や酵母の分離」等の研究も行っています。一方、後藤は、平成28年４月１日付けで神田康三教授の後任として九州大学大学院農学研究院から異動してきました。九州大学では三和酒類株式会社の寄附講座で「焼酎麹菌に関する分子生物学的な研究」に従事しており、日本有数の麹菌研究者です。佐賀大学赴任後も、国菌である「麹菌」を用いた基礎および応用研究を幅広く展開していく予定です。

本研究室では、微生物を利用した幅広い研究展開を目的としていますが、それにも増して実学としての応用微生物学を実践しています。それは、佐賀大学オリジナル清酒「悠々知酔」の製造を研究室所属の学生全員が実施するということです。当時の加藤富民雄教授が産学連携・地域貢献事業の一環として「酒どころである佐賀の特色を活かして佐賀大学をPRできないか」と発案したことにより、「悠々知酔」は平成18年から当研究室で分離された清酒酵母と農学部附属農場（当時）で収穫された米を用いて製造されています。県内の酒造会社で順番に清酒製造することで、清酒業界の活性化を図り、大学と地場産業との産学連携・地域貢献事業の目玉の一つとして企画されたものです。蔵元は２年ごとに交代しており、これまでに県下有数の窓乃梅酒造・大和酒造・天山酒造・天吹酒造・東鶴酒造にお世話になっており、平成28年からは矢野酒造にて製造することが決まっております。平成26年からは「佐賀県原産地呼称管理制度」による「The SAGA認定酒」としても認定されています。製造当初は味や香りなどの酒質を全て蔵元に任せていましたが、平成23年からは「真の佐賀大学オリジナル清酒」を目指して、当研究室の学生が酒質や仕込み配合を決め、自らが製造することを実施してきました。そのため学生達は「きき酒」を繰り返して行い、自らが望む目標酒質を制定し、仕込み配合から全ての工程を考えます。そして、洗米・麹造り・酛造り・仕込み・搾り・瓶詰め・ラベル貼り・箱詰めと全ての工程を学生自らが行います。このことは広くTVや新聞等でも取り上げられ、佐賀大学農学部を大きくPRすることに繋がっていると自負しています。

上記のように、応用微生物学研究室では、微生物分離や性状解析・遺伝的解析等の基礎研究から、製品としての清酒を生み出す酒造りという応用研究までを経験させることにより、広く社会に貢献できる人材を輩出するべく鋭意努力をしております。

2016年度　研究室メンバー

オープンキャンパス時の光景

佐賀新聞の特集記事

悠々知酔

職場では

ＪＡさがにおける園芸振興の取組み

１．はじめに

国内の野菜生産動向を見ると、農林水産省の取りまとめでは生産量は約1200万トンであり近年横ばい傾向ですが、農業従事者は高齢化、担い手不足、労働力不足が進行しており、生産維持が課題となっています。

また野菜の消費動向を見ると、年間一人当たりの消費量は減少傾向にあり、カット野菜等の利便性の高い商品が普及拡大しています。

この業務用野菜は、安価な中国産を中心とした輸入品との競合が激しい状況ですが、近年は消費者の安全・安心志向の高まりを受けて国産需要も増大傾向にあるため、「ＪＡさが」では業務用野菜の拡大に2016年度から次期３カ年計画の中で取り組むことに決めました。農家の経営安定のため、販路拡大、コスト低減に取り組んでいます。

２．「ＪＡさが」の取組み経過

タマネギは、佐賀県として北海道に次ぐ全国２位の生産量です。ほとんどが生食用でしたが、業務・加工用の拡大のため、ＪＡ子会社が定植や収穫などの作業を受託して生産を支えるとともに、１次加工を手掛けて販売を拡大する幅広いサポート態勢を構築しました。

タマネギ定植風景

これには子会社の「ＪＡ建設クリエイトさが」が、作業受託で生産拡大を支えるしくみを構築し定植、収穫作業用の機械を所有し、高齢化地域や大規模化を志す法人にも対応できる態勢をとっています。まずは2015年秋から冬にかけて、タマネギ8.2㌶、キャベツ1.1㌶の定植を行いました。

販路を確保するための１次加工は、子会社の「ジェイエイビバレッジ佐賀」が2015年度から、タマネギの皮むき機を導入して取り組み始め、県産のピークとなる６月に稼働が始まり、１日約２㌧の処理が可能です。

タマネギ収穫風景

販路は外食企業の他、レトルト食品業者などにも拡大すれば１日５㌧まで生産する余力があり、今後業務用先への営業展開を図っていく予定です。

さらに、2016年８月末には容量1200㌧の青果物冷

ビバレッジ佐賀での剥きタマネギ加工風景

蔵保管施設を設置し、増産を進めていく計画です。

この施設では稼働率向上のため、営業倉庫法の認可も取得し、他県産の青果物も貯蔵保管することにより、有効利活用を図る予定です。

3．今後の対応

キャベツでは2013年から、子会社の「ＪＡさが富士町加工食品」がカットを行い、コンビニや大手量販店と契約して販売しています。カット野菜需要の増加により、2017年度には青果物冷蔵保管施設に隣接し、野菜加工の第２工場を設置し販路拡大およびユーザー対応していく予定です。

納富　敏明（Ｓ56年卒・食管）

ＪＡさが青果物冷蔵保管施設

前農学部同窓会佐賀県庁支部長 田代さん　農水省の農業技術功労者表彰
～38年のキャリアで貫いた現場主義の成果～

佐賀県上場営農センター所長の田代暢哉様（Ｓ54年卒・病理）がミカンなどの果樹の病害虫対策技術の改良や普及に貢献したとして、12月16日に農水省から表彰されました。今回表彰の対象となった技術は、農薬の散布量を少なくして病害虫に対する効果を高めたことが評価されています。その結果、農家が浴びる薬剤量も少なくなったということです。本学では地域への貢献を掲げて運営が行われておりますが、この観点からも価値ある表彰だと思います。今後のますますのご活躍を期待したいと思います。

大久保　惇（Ｓ47年卒・土肥）

会費納入のお願い

日頃より、同窓会活動に多大なご理解を賜りまして、厚くお礼申し上げます。

同窓会会報「ありあけ」の発行、総会・懇親会の開催、大学との意見交換会、支部助成活動、在学生への就職支援など、多岐に亘る活動をおこなっています。これらの事業は同窓会費で賄われており、同窓生の皆様には大変ご協力をいただいておりますが、近年は年会費納入率が極めて低く、同窓会運営にも支障を来しています。

出費多端のところ大変恐縮ではございますが、同窓会の趣旨をご理解の上、納入いただきますようよろしくお願い申し上げます。

なお、既に納入をして頂いている方につきましては誠に申し訳なくご容赦の程お願い申し上げます。

支部だより

佐賀県庁支部　佐賀県庁支部総会

９月７日にグランデはがくれ(佐賀市天神２丁目)において、平成28年度佐賀大学農学部同窓会佐賀県庁支部通常総会を開催しました。

平成28年度は、森口辰也、佐﨑智華、若杉葉月、重信光一、原田克哉、平田真紀子、本村勇貴、井上大輔【敬称省略】の８名が新たに会員になられました。その結果､現在の会員数は229名となっています。総会には会員39名の参加があり、佐賀大学農学部同窓会からは川副会長、佐賀大学農学部からは内海教授も駆けつけていただき、熱いエールを送ってくださいました。

議事では、滞りなくすべての議案について、承認をいただきました。

新しい支部長以下の役員については、次のとおりに選出されました。

支部長：溝口宜彦（Ｓ56)、副支部長：南里敏彦（Ｓ57)、田中利磨（Ｓ59)、幹事長：松尾　定（Ｓ61)、会計：谷口宏樹（Ｈ４）

幹事：仲原賢一（H20)、岩城雄飛（H17)、**柴原賢介（H13)**､高取由佳（H11)､**熊森　昇（Ｈ４)、井上賢二（Ｈ３）**

監事：広田雄二（Ｓ58)、高田俊行（Ｓ58)【敬称省略】

〈(　)は卒業年次、新役員をゴシック体で記載〉

新入会員の皆様への一言アドバイスを農大の山口さんからいただきました。

これからの県庁生活を送る上で、心に響くアドバイスを受けたものと思います。

総会後の懇親会では、まず、農学部同窓会から差し入れいただいた佐賀大学のお酒「悠々知酔」で乾杯しました。その後は、各自の近況報告や楽しみにしている「抽選会」がありました。

皆さん、時間を忘れる程に先輩・同輩・後輩と和気あいあいと懇談を楽しむことができました。同窓会の魅力、ここにありです。

来年は、総会に多くの会員が、出席していただけるようにもっと工夫していきたいと考えています。

来年３月に開催される「先輩を送る会」には、多くの会員の皆様が参加していただけることを期待しています。

熊本県庁支部　熊本県庁支部総会

熊本では、平成28年４月熊本地震、６月豪雨、10月阿蘇山噴火と大きな災害が立て続けに発生しました。被災された皆様には、一日も早い復興をお祈り申し上げますとともに、御支援をいただきました皆様には心より感謝を申し上げます。

このような状況ではありましたが、こういう時こそ結束力が必要であると、７月29日（金）午後７時からアークホテルにおいて、「熊本県庁・佐賀大学農学部同窓会の通常総会及び懇親会」を開催しました。

総会には、佐賀大学農学部同窓会本部から光富副会長、吉賀理事にも駆けつけていただき、20名の出席となりました。

総会では、永井会長挨拶（代読）の後、会計報告、

役員改選が行われ、新会長に塩貝執氏（S55）、副会長に城秀信氏（S56）、監事に長田伸一氏（S57）、事務局に坂本豊房氏（H10）が選出されました。

総会後は懇親会に移り、現在の状況や昔話に花を咲かせながら親睦を深めるとともに、今後も会員同士の結束力を強めていくことや、来年の再会を約束して盛会のうちに閉会となりました。

塩貝　執（S55年卒・作物）

編集後記

農学部同窓会誌の巻頭言には、様々な分野で活躍している卒業生に登場していただき、在学生や同窓生へのメッセージを執筆して頂いております。今回、弁護士をされている伊藤様には農学部を卒業して司法界で仕事をされるようになったいきさつ等を語っていただきました。この中で、農学部は生物、化学、機械、医療、経済といったいろいろな分野の学問で成り立っている懐の広い学部であり、在学生にはいろんなことに興味をもち、どんどん突き進んで自分のやりたいことを見つけてほしいといわれています。農学部同窓会では就職ガイダンスが終了した後、在学生と卒業生との交流会を実施しており、その時に実施したアンケート調査では「自分が何にむいているのかわからない」という回答が多く見受けられました。これから就職活動をされる在学生の方は是非参考にしていただき、自分自身の道を切り開いていただきたいと思います。

農学部同窓会では、在学生への支援を行うための活動も行っておりますが、昨今は同窓会費が思うように集まらず特別会計の積立金を取り崩している状況が続いております。卒業後10年を経過した皆様にはご負担をおかけいたしますが、同窓会費納入にご協力をお願いいたします。

編集担当：大久保　惇（S47年卒・土肥）

協賛広告

この度の同窓会報発刊に際しまして、皆様より協賛広告をお寄せいただき誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げますとともに、協賛各社の今後のご発展をお祈り申し上げます。

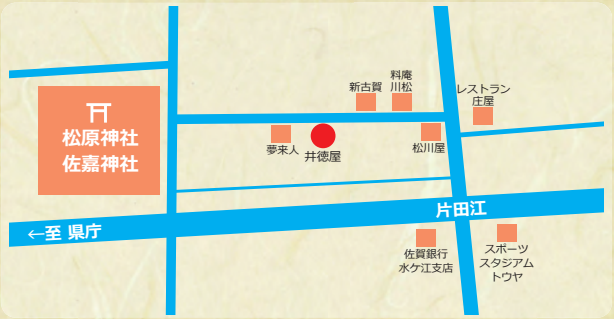
お客さまの笑顔のために。今、私たちができること。

お客さまへ安心・安全な製品をお届けするために、新日本製薬は、薬用植物の栽培研究から
国産原料の調達、製品開発、品質管理、美しい肌づくりをめざした提案型の販売、アフターケア、
さらには物流システムにいたるまで一貫して管理し、手掛けています。お客さまの最高の満足を求めて。
私たちは、感謝の心を忘れることなく、お客さまとともに、未来に向かって歩み続けます。

新日本製薬
One to One health & beauty-care.
福岡市中央区大手門1丁目4-7
0120-408-444
http://corporate.shinnihonseiyaku.co.jp/

こだわり食品の店 井徳屋
佐賀市松原3丁目2-16 〈TEL〉0952-23-4373

佐賀の豊かな大地で育った農薬不使用
栽培の野菜やお米、嬉野茶、無添加ハム、
自家製酵母のパンなど美味しい地場産
の食品を取り揃えております。



ホームページからも
ご注文いただけます。
http://www.itokuya.com

第20回　佐賀市景観賞　受賞
「濠と楠とともにある建築　お濠とホテルニューオータニ佐賀」

昭和51年、ホテルニューオータニ佐賀は佐賀市他県内で開催された若楠国体にあわせてお濠端で開業しました。設計は黒川紀章建築都市設計事務所で、地方都市における「リゾート的要素」や屋根を中心とした「シルエット」などがテーマとされました。

The New Otani
ホテルニューオータニ佐賀
〒840-0047 佐賀市与賀町1番2号 TEL.0952-23-1111(代)
www.newotani-saga.co.jp

MORIMITSU

Grain & Pet Care Communication

株式会社 森光商店

〒841-8611　佐賀県鳥栖市藤木町字若桜9-7
PHONE.0942-85-1125㈹　FAX.0942-83-8868

ホームページ http://www.morimitsu.co.jp